

TSしたダン・モロの胃がマツハで蜂の巣になって「クソが」って
言ったガルパン転生《連載版》

道長(○○○投げ機)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TSしたダン・モロは絶対に美少女という謎の電波を受信した。

そう思うだろ？あんたも。……思わないのか？……思つてるんだろ？

皆様のおかげで連載版移行。気長にお付き合いください。

目 次

TSしたダン・モロの胃がマツハで蜂の巣になつて「クソが」つて言 うガルパン転生	1
マヨネーズが生まれた日（前編）	
マヨネーズが生まれた日（中編）	
マヨネーズが生まれた日（後編）	
はじめての戦車	
はじめての戦車 その2	
	46
	39
	24
	16
	6
	1

TSしたダン・モロの胃がマツハで蜂の巣になつて
「クソが」つて言うガルパン転生

「これでよし……と」

最後のチェックを行つて、旅行カバンのチャックを閉める。おつちよこちよいな自分が、これだけ確認すれば忘れ物はないはずだ。念のためにと、もう一度部屋を見回す。家具や集めたぬいぐるみの無い自室が、否応なしに現実を突き付けてきた。

ここにお前の居場所は無い。

全世界で、自分の席だけくりぬかれてしまつたみたいだつた。

（いけない。そろそろ出ないと）

最後は鍵を置いて、開けっぱなしでいいと管理人さんが言つてくれたから問題ない。わざわざ私のためだけにヘリを出してくれると言つてくれた都合上、遅れたら失礼だ。

夜道を歩く。ヘリポートまで、そこまでの距離は無い。この短い道程が、私の見る最後の黒森峰学園になるんだろう。姉が卒業するときに来れる機会があるかもしれないが、今の自分では難しい。何より母が許すまい。

静かな町並みだとと思つた。写真のなかを歩いているみたいな。傍から見れば逆なのだろうけど。

（みんなに悪いことしちやつたな。赤星さん、あんまり思い悩まないでくれるといいけど）

あとは、姉とエリカさんか。姉は声をかけてくれることは無かつたが、何となく、裏で私への追及が逸れるよう動いてくれていたのは分かつた。

エリカさんは逆に、声をあげて私の転校に最後まで反対してくれた。
こう言つてはなんだが、私は周りの人間に恵まれてるなあと思つた。

(玉子先輩には声をかけるべきだったかな?)

ただ、一番は玉子先輩だ。私のせいで負けた決勝戦、そのあと反省会で責任を問われた私に。

「あんた、人の命を助けたヤツに最初に言う言葉がそれか?」

「誰ですか? あなたは」

私と母の間に入つてくれたのが玉子先輩だつた。母の鋭い眼光に正面から向かつていつた人は、父を除けば玉子先輩が初めてだつた。「セレブリ……、2年の諸星玉子だ。人命がかかつた場面だぞ! それを責めるのか!」

「救助隊は常に控えています。勝負はもちろん、下手をすれば救助隊の方々に更なる迷惑をかける事態になつていたかもしません」

「だからってこりやないだろう! 一つの命を思うことが、そんなに愚かだつて言うのかよ!」

「……だから貴方は何時まで経つても一軍半なのです。諸星玉子さん。犠牲なくして大きな勝利は得られない。黒森峰に来ている以上、西住流の考えは分かつていますよね?」

「そんなことは知つてる! けどたかが全国大会の優勝に人の命をかける価値はあるのかよ! その考え、絶対にいつか、どんなねえ歪みが生まれちまうぞ!」

いつもの玉子先輩からは考え方られないくらいの舌鋒だつた。特別、玉子先輩と仲が良いわけではないのに。

先輩との仲は、姉を除いた他の先輩方よりは話すかな? と言つた程度だつた。男性みたいな自信満々のオレ口調と、実戦での情けない悲鳴で1年生の間でも有名な人だ。操縦士としての技術はあるのに、ヘタレな性分が台無しにしていると、よく話題になつていた。

私個人としては、姉のフィルターを通して私を見ない、貴重な人だつた。これが先輩以外の人だつたら、媚びを売つていると思われるのだろうが、玉子先輩にはそういう噂が立たない。

その先輩が何故か私を庇つてくれていて。

「ですが、みほのせいで10連覇を逃したのは事実です。いかなる理由があつても、周りは戦犯として見ます」

「それはてめえら大人が情けねえからだろうが！　お前達が、社会が、もう少しだけ優しかつたらアイツはあんなことを……！」

「何を言つているのかは分かりませんが、これ以上貴方と話しても時間の無駄です。連れていきなさい」

「おい！　話は終わっちゃいねえぞ！　離せよ！　みほ！　お前は悪くねえ！　そんな顔すんじゃねえ！」

引きずられていく先輩を呆然と見送つていると母が何か呟いた。

「彼女がいるのなら……」

上手く聞き取れなかつたが、そのあとは母の詰問の時間だ。語るまでもないだろう。

そのあとなんやかんやあつて、戦車道に関わらないことを条件に大洗への編入を承諾してもらつた。そこから先輩とは一度も話していない。

本当ならお礼を言わなくてはいけなかつたのに、時間と環境と心がそうはさせてはくれなかつた。

気がつけばヘリポートだ。最後の風景を心に刻むつもりが、物思いだけで終わつてしまつた。すぐくもつたいないことをしたと思つた。

当たり前だが離陸に必要な作業員の方以外、発着場には誰もいな

い。

(仕方ないけど、寂しいな)

なんだが自分の16年的人生で積み上げたものを、全部切り離してしまつた気がした。

「西住みほさんですね？」

「あ、はい。今日はお世話になります。あとこれ。大したものじやないんですけど、皆さんで食べてください」

「おつと。気を使わせてしまつて悪いね。そんな暇はないだろうに」

「い、いえ。私の都合ですから」

スタッフの方の声で現実に引き戻されて、準備していた手土産を手渡す。罵倒がとんでもるものだと覚悟していたから、自分を慮つてくれたことに驚いた。

「世間はあんなことを言うけど、俺は君の行動に感動したよ。自分の身を省みず、誰かを助けることなんてそう簡単に出来ることじやない」

「そんな……、私はただ無我夢中で」

「それがスゴいのさ。ただ今度は周りを少し見れるといいかも知れないね。下手を踏めば君の命も危なかつたんだから」

「……はい。肝に命じます」

これは外野が好き勝手言つてただけだから、そんなに畏まつて聞かなくてもいいんだよ。

そう言つて苦笑いを浮かべている。

少し、気分が楽になつた。

「そろそろ出発の時間ですね」

「そうなんだが、もう一人が来なくてね。もうエンジンを温めないといけなんだが」

「もう一人？」

「ああ。昨日急にねじ込んで来てね。君のように礼儀正しい子ばかりなら仕事が楽になるんだけど」

「え、あー……。ありがとうございます？」

どうしたんだろう。急な帰省者が出了のだろうか？

「おーい、待つてくれえ！ オレも乗るぞー！」

その声にハツとなつて、人影を探す。その人は手を振りながらこつちに走つてくる。

セミロングの無造作な赤髪に、健康的な肌色。昔のスーパーheiローが描かれたTシャツとGパン。いつもよく分からぬ自信でつり上がつている口角が、いつ悲鳴があがつてもおかしくないくらい情けない形をしている。

「玉子先輩！」

後に世界戦車競技会は深刻な出血を強いられる。

近代スポーツ史上、最も愚か且つ、最も妥当と言われた規則、通称「マヨネーズレギュ」が生まれた原因が、今日この日であることを、

今は誰も知らない。

マヨネーズが生まれた日 〈前編〉

「とりあえず、皆やる気になつてくれて良かった……けど」

私、角谷杏の手元の書類に載つているのは戦車の整備に必要な部品、機材のまとめである。

「みんな頑張つてたもんね。でも一回の練習試合でこんなにお金がかかるなんて……、はい、概算です」

副会長の小山柚子が計算機片手に同意すると、ため息をつきながら計算用紙を私に差し出した。予想通りとはいえ、〇の多さに辟易する。

「柚子うう。これつて実は〇が1つ消えたりしなーい？」

「無理だよ。多少は切り詰められるかもしけないけど、大会のことを考えたらこれくらい買わないと。むしろまとめて買う分、安くなつてるんだよ？」

「だよね。でも予算が足りないよー」

当たり前だが試合をすれば戦車は壊れる。壊れれば修理をしなくてはいけない。そうなれば新たな部品が必要になる。特に特殊カーボンを使用した装甲は、安全のため使用回数が制限されている。そのため優勝前提に計算すると、オーバーホールも勘定に入れなくてはいけないわけで。

「それでも自動車部のおかげで、設備投資が最低限で済んだから助かつたね」

「そだねー。もし人員含めて1からつて考えたらゾツとする」

自動車部のおかげで整備は何とかなつている。設備も流用（それも元々は戦車道用のものだったようだが）出来るため、そこが経費〇で確保できたのは大きかった。整備員を外部から募ることになつたら……、考えたくもない。

「とは言つても無いものは無いんだよ。他に切り詰められる所あつた？」

「部活動にもかなりがまんしてもらつてるからこれ以上は……。あとは学園艦そのものの維持費になつちやう」

「それは学校内だけで済む範疇を越えてるから却下。うーん。実家に頭下げるかー」

やだなー、でも背に腹は代えられないし。

「文科省にお願いして、他校と同じく補助金出してもらうしかないんじゃ……」

そんな私を見かねて、柚子が気をつかってくれた。いくら彼女しかいないとはいえない油断した。我ながら大分疲れている。

「それだつたらサラ金に手を出した方がマシだよ。貸しを作つたら、それを盾に約束を反故にされるかもしれない」

「杏!? それでもサラ金は流石にまずいよ!」

「ジョーダンだよ。冗談。まともになんてやつてられないって。こんなの」

こういうときは干し芋を食べるにかかる。……うん、おいしい。やつぱり大洗学園艦の干し芋は……最高やなつて。ビニール袋に入つた大量生産品だが、それでもこれが口に入ると心が落ち着く。氣を利かせた柚子が、お茶を淹れてくれていた。

一応無理を通してもらつている形なのだ。直接の援助を受けるのは、誰がどう考へても悪手になる。何よりアレに、これ以上頭を下げるのは面白くない。

「はい、お茶。鴉羽ちゃんがいたら、なんとかしてくれるかな?」

「あんがと。いや、ポツポちゃんでもこれは無理でしょ」

会計係の席は現在空席だ。謹慎期間は今日までだつたはずだが、今は何をしているやら。「ちよつと出かけるから誤魔化しといて」と言われたので先生方には適当に言い含めてはいるが。

「でも、鴉羽ちゃんだよ?」

「これで金銭面までカバーし始めたら、ちよつと無敵過ぎない? あの子」

腰まである黒髪ロングの超絶美人で運動関係はほぼ全てで校内一(男子トップクラス、ただしカナヅチ)、勉強をさせれば上の中(おそらく加減している)、口調こそ時折男性的だが、それが頼もしいという女子も多い。

何より、ある一部分の装甲がヒツジヨーに分厚い。追加装甲でも付けてるんじゃないかと思つたが、素（しかもサラシ）で押さえ付けてあつた！）だつたことに知つた時の衝撃たるや。

プールの授業で発覚した時、本人は「邪魔」と言い放つたが。そして同意する桃と柚子を見て、悲憤のあまり3人をプールに突き飛ばした私は悪くない。カナヅチということも、そこで初めて知つた。あんなデカイ浮き袋が2つ付いてるのに。シリコンか？シリコンなのか？でも水に浮いてたんだよな。

（頼りにはなるんだけどね）

桃以外で、深部ブロックの生徒が言うことを聞くのはポツポちゃんだけだし、文科省と面談の日取りを決める時、渋つた相手に彼女が話し出したら急にアポがそれたり、あげくの果てに燃料が高騰した時は、どこからともなくタンカーを呼び出して、直接給油させたりした。タダ無料で。

……あれ？ 結構なんとかなるんじやない？

「いやいや、いくらポツポだつてこの額を現金で準備するのは……、お金のことは一旦置いといて、実際の試合について考えようか。西住ちゃんは流石だつたねー」

資金に関しては、生産的な考えが浮かびそうに無いので、今はどけておこう。ということで練習試合を整理をしよう。

結果的に負けてしまつたが、練習試合とはいえ聖グロリアーナ相手にフラッグ車のタイマンまで持ち込めたのなら、全国大会出場の最低ラインはクリア出来ている。

「杏がもうちょっと真面目だつたら、勝てたんじやないですか？……会長としては合格なんだね」

「もうちょい西住ちゃんが不甲斐なかつたら、私が引つ張ろうと思つたんだけど、あの様子なら指揮は一任した方がいいかなー」

今回のことでの皆、西住ちゃんをトップとして認めただろう。

指揮官には、用意できる最高の人材を据えられた。あとは各々の練度を底上げしかない。幸い、ある程度全て教えられる卵ちゃんがいる。

「そういうや卵ちゃんは結局、どこかのチームに加わったりはしなかつたんだ」

「諸星さんは「車長以外だと足並みが乱れやすいし、今回は様子見する」って言つてたよ？」

そして生憎オレに車長の適正は無いとも。

分からなくもない。少し黒森峰時代を調べさせてもらつたが、練習はともかく、実戦では本人の気弱な性格が災いして、思つた以上の成果があげられていない。プレッシャーのかかる車長は、なおのことだろう。

逆に技術は人並み以上にあるから、こうやつて素人に一から教えるのは、結構上手かつたりする。気質についても、出来ない人間に合わせられるというか。仮に西住ちゃん一人でやつていたら大変だつただろう。

「まあ、適材適所つてやつかな」

茶をすすつたあと、新たに干し芋を手につけるとノック音が聞こえた。

「失礼します。久し振りね、会長、副会長」

「鴉羽ちゃん！ 大丈夫だつた？」

「ポツポちゃんおひさー。干し芋食べる？」

今は遠慮します。と手で制すポツポちゃん。相変わらずの美人である。同じ美人系でも、五十鈴ちゃんとはまた違つたタイプだ。清楚だけど、どこか妖艶というか、落ち着いてるけど活動的というか。「どこ行つてたの？ 鴉羽ちゃん」

「ちょっとね。副会長、これお土産。開けてみて」

そう言つて近寄つていた柚子に、鞄を直接手渡した。

普通は中から取り出して渡すのでは？ と思つたが、土産に文句を言う気は無いのか、柚子は素直に受け取つた。

「わあー、ありがとう。何かな？」

「ほほーん。黄金色のお菓子かい？ 殊勝な心掛けだ。誉めてつかわ

……」

チャックを開けると諭吉さんが顔を覗かせた。勿論束でだ。

2人の呼吸が、止まつた。

スウー……、ハアー……。

思考停止した頭を再起動するために、肺が破れんばかりに目一杯深呼吸をする。

「……鴉羽ちゃん？」

笑顔の鴉羽に問い合わせた。それでも声は震えていた。自分で分か るくらい。

「必要でしょ？ それ」

「いや、どうやつて手に入れたの？」

柚子は笑顔のまま固まっている。あつちはまだ復帰出来そうにな い。

横から見ていた私ですらこのザマなのだ。直接受け取つていたら、自分もショックで凍りついていただろう。

「どうやつてつて……、稼いだだけだけど？」

「だからどうやつてつて聞いてるの。方法、過程」

「ああ、なるほど」

そうすると事も無げに
「体でだけど？」

凍り付いていた空気がピシリと音を立てた気がした。私は干し芋を取り落とし、柚子は床にぺたんとへたりこむ。

「え。どうしたの2人とも？」

その言葉からたっぷり5秒程固まつたあと。

「何やつてるの鴉羽ちゃん！」

いつもの柚子からは想像が出来ない、凄まじい剣幕だ。ポツポの肩 を掴む両手はプルプル震え、涙目で精一杯睨み付けている顔は泣いて いるのか、怒っているのかわからない。

「そんなことで解決したつてダメだよ！」

「そんなこと……？ たしかに誉められたものではないかも知れない けど、これは正当な報酬。資金洗浄は済んでるし、何なら直接物資に すればいいんじゃない」

「そういう問題じゃないよ！」

「ちよ、ちよつと揺すらないで、副会長！　肩が、首が」

「柚子。気持ちは分かるけど抑えて抑えて。そのままだと、ポツポちゃんの首がパイルダー OFFするから」

青天井で感情を昂らせていた柚子だが、私の声は届いたようで、渋々と言った風体で手を離した。代わりに怒りの混じった強い視線を、ポツポに向け続いているが。

「うん。資金はありがたいけど、柚子が言う通りだね。これは受け取れない」

「……まずかつた？」

「当たり前だよ！」

と、言いたかつたが、イマイチ分かっていない顔をしているため胸の内に押し留めた。

「色々言いたいことはあるけどさ。一番気に入らないのは、私達に話もしないで1人で解決しようとしたこと」

相談されたら一もなく二もなく、ポツポを止めただろうが。

「このお金を受け取つたら、ポツポ1人に学園艦のことを背負わせたことになつちやうからね。せめて私達は共犯者にしてくれないと」

それでも無理なら、それしかないのなら、片棒くらい担がせて欲しかつた。

「学園艦の命運と個人の人生、どっちを優先するって言われたら、なんも言えないよ？ けど簡単に学園艦つて答えられるほど、ポツポの幸せも軽くはないんだ。うん」

西住ちゃんをムリヤリ戦車道に引き込んだ私が言つても、説得力は皆無だけどね」。

改めて干し芋をつまみながら、チラリとポツポの顔色を伺うと神妙な顔で考え込んでいた。

「……そうか。もしかしたら、また、繰り返す所だつたのか」「ごめん。聞こえなかつた」

「ただの独り言。気にしないで、次からは相談するから」「次がないことを祈りたいね」

「全くね」

なんでもないと言いたげな顔をしているので、あまり深入りしない方がいいだろう。

柚子も黙つてゐ間に少しクールダウン出来たようだ。相変わらず不機嫌ではあるが。

「しつかし結構な金額だね」

「額相応。今回は謹慎期間、目一杯を駆使して働いたから」

「謹慎期間目一杯……」

柚子が想像してしまつたのか、微妙に顔を赤くして呟いた。想像力豊かなのは良いことだが、時と場合によると思う。……でも人間、未知への好奇心つてのは大事だよね。うん。

これは純粹な知的好奇心だ。やましいことは、一切ない。

「ええ。都合上、拘束期間は長いし、仕込みも随分かかつたわ」

「拘束……、仕込み……」

柚子、余計なことを言わないで。私も釣られて変な想像しちゃうから。黒のアレな感じのアレに、蠢くアレとか。あれ？ もしかしたらアレな縄？

加速する想像と干し芋を食べる速度に対しても言語能力と思考力が反比例していく。これもう（怒つてんのか盛つてんのか）分かんねえな？

「今回のクライアントは随分紳士的な方でね、ちょっと手こずつちやつたの」

それは紳士という名の変態じやなかろうか。

気がつけば手元の干し芋が失くなつていて。喉もかさついていたので、お茶を一気に飲み干すと、再び干し芋にかじりつく。

想像にアレな感じの中年のオツサンが追加された。下卑た笑みをで口元を歪ませ、アレな格好でポツポににじり寄つていく。アレな目のポツポは、アレな感じでアレしていく……。

反応しなくなつた柚子が気になつて見てみると、真っ赤な顔で目をぐるぐる回していた。

おい。さつきの剣幕はどうした。柄じゃないことだからつて切り換えが早すぎない？

想像力に對して義憤^{理性}が貪弱過ぎるだろ……。女人は救い難しと
ブツダも言つてゐるけどさ。

「ある程度選ばせてもらつたから仕方ないとはいへ、まどろっこしい
のは苦手なんだけどね。……どうしたの2人とも？」

「いや。うん。そうだね。パパっとやつて終わりの方が楽？　でしょ
？」

そういう経験がないため、想像しか出来ないがきっとそうなのだろ
う。……脊髄で会話してしまつたことに微妙に後悔する。これ経験
アリと思われてない？

ポツポは私の憂いを肯定するように、渋い顔で頷くと。

「うーん。でもそういうのはこう……受け取る側が後ろめたいでしょ
？　会長は問題なくとも周りがね？　多少、稼げたのは事実だけど」
いつたいナニが違うんですかねえ……？

あつ（本番無しとか）。そつかあ（縛られるんじやなくて縛る側だつ
たり）……。確かにポツポには鞭とか足とかハイヒールの方が似合う
ね。このお金はポツポの血と涙つていうより、オツサンの汚い悲鳴と
体液つてわけ？　ヴォエツ！

ん？　てことはなに、謹慎期間中ずっと女王様だったの？

謹慎つてなんだよ（哲学）。

「どつちもどつちだよ！　会長！　まさか『経験が……』

「違う違う！　想像だよ！　そーゾー。イメエイジ（無駄に良い発音）！

私は柚子みたくムツツリじゃないからさ！」

「そ、それは杏だつて同じでしょ？　未経験なら似たようなものじや
……」

「ベッドの下、ブツクカバー」

「な、なんでそれを……」

それは男子高校生みたいな所に隠すヤツが悪い。冗談でやつて實
物を見つけてしまつた時、桃と一緒に気まずい空気になつてしまつた
ことは黙つておこう。

サイズに比例して性欲は増す理論、あると思います。

焦つた様子で口をパクパクさせていた柚子だが、短く息を吐くと、

意を決した顔で口を開いて。

「杏も結構、エグいの持つてるよね？」

「……なんのことかな？」

「キヤスターの二重底。ピンク」

「ブフツ！ ケホツ！ ケホツ！」

干し芋が気管に入った。いや。なんで？ なんで？

「杏が何か隠すとしたらどこかなーって思つて、デ○ノートがあつたからキヤスターの底を見たら……」

「使つてないからノーカウントだよ！ ノーカウント！ 大体、ポツポが押し付けてきたものだし！」

「私のだつてそうだよ！ 鴉羽ちゃんが……！」

息を荒げながら、2人で渦中の人物を見やると、ソイツは心底不思議そうな顔をして。

「どちらも記憶にはあるが、なんでそんな話になつてるの？」

「いや、原因はポツポ（鴉羽ちゃん）でしょ!!」

あらゆる元凶のあまりにあんまりな態度に、思わず2人で叫んでしまつた。しかし、どうもポツポは、事態が~~×~~呑み込めていないようだ。「いや。だからなんで……で○○○○○やら×が出てくるんだ。私はそんなこと一言も」
×

「ううら若き乙女がそんなこと堂々と言うな！」

私の大声にポツポは押し黙つた。

さらつと言つてるけど、これが非○女の余裕なのか？

キスですらドラマの話なのに、△△△とか漫画の話なんですけどお

！

ましてや□□□□□とかファンタジーですけどお！

第一こつちは血縁以外、男に触れたことがない（真実）純粋培養（ほんとお？）のお嬢様育ち（笑）なんですけどお！

「話してないけどさあ！」

一言も発してないけどさあ！ 連想する

じやん？ 清純な（？）女子校生に話す内容じゃないじやん！？ 事実

だとしても未通女にはキツいじやん（大胆な告白）！？アゼルバイジヤン（意味不明）！？」

隣で茹で蛸みたくなつてゐる柚子が、首をブンブン縦に振つて同意してくれる。そりやあ千切れんばかりに。

だが、それでもポツポは首を捻つてゐる。

だから分からるのはこつちだつて！

「だからなんで、傭兵稼業の話でそんなことになる？」

「またいつた、ちよつといい加減に……ん？」

今何て言つた？

「ん？」

鴉羽ちゃんがポツポじやなくてオウムになつてしまつた。

そしてこの時、出会つてから初めて、3人の心が完全に一致した。

「「「ん!」」

マヨネーズが生まれた日 〈中編〉

「え？ 私の聞き間違い？ 今傭兵稼業とか言わなかつた？」

「ええ。言つたけど？」

「へえ傭兵稼業。ふーん。

「中東で、ちよつと資源プラントの破壊工作をしてきたの。死人が出ないようやつたから手間取つたわ」

「へえ破壊工作。へえー」

「へえー」

さも当然のように話すポツポ。相場は知らないが、場合によつてはこれくらいの額を稼ぐのは可能なんだろう。うん。一応、反応している柚子もよく分かつてはいないと思われる。

……

「いやいやいやいや!!」

柚子とリアクションが完全にシンクロした。ポツポがやらかす時は、これに桃を加えた3人でツッコミを入れるのが常だが、首から腕までの動きが一致するのは初めてだつた。（予算再編（物理）を敢行したのは、歴代生徒会でも彼女だけだろう。おかげで戦車道における最低限の予算確保が容易になつたが）

「破壊工作つてなにさ!? 石油施設をドカーン、みたいな!?」

「そんな感じね。安心して、やつたのは非合法な所だつたから」

「安心とかそういう問題……、問題なんだけど、そうじやなくてさ」

「報酬の話？ なんか依頼元も被害を受けたらしくてね。想定より安くなつたの。無駄な被害を出さなかつたから、ほんとは追加報酬が出るはずだつたのだけれど」

「だから違う。そうじやない。」

「この世界の、どこに、傭兵稼業をする、女子高校生が、いるのかつて言つてるんだよ……！」

「JKが戦車に乗つてるんだから、JKの傭兵がいてもおかしくないと思うのだけれど……」

「いや。おかしいから」

特殊カーボンで守られた車内で模擬弾を撃つ戦車道と、生身を本物の銃弾に身を晒す傭兵、どちらが危険かは言うまでもない。あとポップがJKというと、どことなく生々しい感じがする。

「実際にドンパチするようなヘマはしていないわ」

「鴉羽ちゃん、あなたがどれ位凄い傭兵か私は知りません。ですが、少しでも貴方の命に関わる様なお金の入手方法は、許容出来ません」

横から努めて平坦な声が聞こえた。声の主は悲嘆も怒りもない、真剣な表情の柚子だ。冷静になるのは柚子の方が早かつたらしい。

思いつきり溜息をついて、椅子が鳴くほど寄り掛かる。仰ぎ見ても、代わり映えしない古びた天井があるだけだが、言いたいことをまとめるのには十分役立つた。

「自分で自分の葬式代稼ぐ様なことは、ご遠慮願いたいよね。終活にはちょっと早すぎるじやん？」

柚子と2人で畳み掛けてみたが、どうも相手は納得していないようだ。見るからに、頭上にハテナマークを浮かばせているような仕草をしている。

「……戦車だつて危ないでしょ？」

「だから、本物の戦争とは違うじやん。特殊カーボンだつてあるし、戦車はあくまでも競技だよ」

「……戦車が忌避されて女性のものになつたのに、何故か最新のMBTが開発されてるし、よくわからん世界だ。スポーツ用品の新作のつもりか？ 兵器は何処までいつても兵器だろうに……」

「何か言つた？」

「なんでもない。私の感覚が間違つていたようね。もうしないわ」

不満げに反論していたポツポだが、とりあえずは同意してくれた。が、この感じだと何かあればまた1人でやらかすだろう。

今回の傭兵稼業もそうだが、彼女は落ち着いているようで変なところで常識がない。逆に妙なことに詳しがつたりする。例えば、ひとつ前に潰れた企業とか。ローゼン○ールなんて初めて聞いた。

「鴉羽ちゃん、これからも無茶や無理をあなたにお願いすることになるけど、あなた1人が犠牲になるような真似はしたくないの。杏や桃

ちゃん、これを聞いたら皆そう言うと思うんだ」

「でも実際、資金繰りに困つてるんでしよう？」

「だから皆に話して？　出来る人に頼りきりつていうのは違うよ」

その真摯な態度が反論する気を奪つたのか、ポツポはそれ以上は何も言わず、静かに頷いた。柚子のこうした正攻法での毅然とした態度は、私も真似できない。

「一区切りついだし、お茶でも飲もうか。私が淹れたげるから、2人は座つてて」

「会長、お茶なら私が」

「いいのいいの。たまには自分で淹れたくなる時もあるでしょ。不味いのは出さないよ」

腰をあげようとした柚子を適当に制して、席を立つ。私1人では彼女を黙らせることは難しかつただろうし、これくらいはお安い御用だ。これを機に、少しほとぎすが落ち着くといいのだけれど。

「破壊工作つてどんなことをしてきたの？」

「本体を壊すと始末が面倒だからね。主に電子機器とかパイプとか。もちろん人的被害が生じないよう、下準備した状態でね。流石に人を殺したお金は受け取れないでしょ？」

「……うーん。それでもやつぱり躊躇つちやうかなあ。誰かに迷惑をかけて稼いだお金なんだよね？」

「人間、生きてる限り誰かに迷惑かけるんだから、多少はね？　むしろ被害者はつきりしてる分、クリーンじゃない。正直手間がかかり過ぎて、スファイアを鎮圧したときの方が楽だつたかな……」

「それでもだよ。傍を楽にするで働くなんだから。……スファイアを鎮圧つて何をやつてるの……？」

「ん？　ああ。年寄りの独り言だから気にしないで。昔の話よ。随分昔の、ね」

「年寄りつて……」

急須の中の出がらしを捨て、新しい茶葉を蒸している傍らで、2人が楽しげ（？）に談話している。いや、笑顔だけどね？

「ポツポが同じ年だとは思えないけどさ、年寄りはないんじゃない？」

「ほいお茶」

「ありがとう。ものの例えよ。昔はちょっと口に出来ないようなこともやつてたから。どうしても聞きたい？ 好奇心は猫をも殺すつて言うけど」

「遠慮しとく。どう見ても死亡フラグじゃん、それ」

お礼を言う柚子にもお茶を渡して、応接セットで三人揃つてお茶を一口。

「そういうえば、2人とも私が何で稼いだと思ったの？ 何か傭兵以外だと思つてたみたいだけれども」

湯呑みを傾ける角度を誤つた。熱湯が口内粘膜を襲う。むせそうになつたが氣合いでこらえた。

「……いや。とにかく危ない仕事でもしてきたのかなつて」
やけどでしごれる舌を必死に回しながらそれっぽく言い繕う。柚子を横目で伺うと、聞こえていない振りをして無言で茶をすすつてる。顔面神経痛を患つているような顔で。

私も聞こえていない振りをすれば良かつた……！

今更遅い気もするが、誤魔化そうと再び湯呑みを傾ける。熱いお茶が火傷した口内に染みる。

「その割りには、なんで○○○や××が話に出て……ああ」
×
ポツポツがポンっと掌を叩く。
×

「エン○ーつてやつ？ 声を掛けられたことは、確かにあつたけれども」

「ブフウツ！」

今度は2人とも耐えられなかつた。主に声掛け事案のせいでの。「さつきから息ピッタリね。あなたたち」

「一体誰のせいだと思つてるのかな……！」

「確かにあり得るかも。相場調べたら、ワンチヤンこれぐらい稼げたし。○女つてだけで結構値段あがるのよね。最近は膜なんて人工で作れるのに」

「おいやめろ」

台詞が完全にこなれたそれである。柚子なんてさつきからむせつ

ぱなしだぞ。

「そつちで稼ぐ気は最初からなかつたわ。どうもサービス業は苦手なの」

「サービス業の方達に謝れ。今すぐに。それと傭兵がエン……より健全とは言い切れないと思うんだけど」

声かけ事案については、触れまい。しかしポツポは意地の悪い笑みを浮かべる。ク〇が。

「何言い淀んでるの？ ハツキリ言いなさいな、援〇つて。それとも正式に援〇交際つて言つた方がいい？ 嫌なら売〇、〇リ、サ〇、選り取り縁よ？」

「いい加減セクハラで訴えるぞ、このエロオヤジ」

「やーねー。想像したのはそつちが先でしょ？ 逆ギレとか怖いわー。キレる若者怖いわー。痴漢の冤罪つてこうやつてうまれるのねー」

「うつさいわ。傭兵なんて一般女子高校生の収入としてありえんでしょう。Y o u ○ u b e rとか、どつかの社長とか、旅館の女将でしたの方がまだ現実味があるわ」

「どうどう、2人とも落ち着いて」

やつとこさ咳が収まつた柚子が、さも自分だけは冷静なように場を収めようとしてきた。だが私は知つてゐる。生徒会で一番エロいのは彼女だということを。それが被害無しというのほは、なんか納得がいかない。

「生徒会のピンク担当が何を偉そうに……」

「ピンク担当!? それ鴉羽ちゃんじやなくて私なの!?」

「ポツポはピンクつていうより、色々な意味で黒担当じやん。そんなものぶら下げて、ピンク以外あると思つた?」

「それは偏見だよ！」

「うん、柚子はピンク担当ね。私、下着は黒派なの」

「そつち!? 今日は水色です！ ピンクじやありません！」

「それ地味にエグいヤツじやなかつたかしら?」

「う、だつてサイズが……」

ポツポの援護射撃が柚子にクリーンヒットしたところで満足。でも微妙に納得がいかないのは何故だろう。2人と案内される売り場が違うからだろうか。

そういうやサラシしてない時は、大体黒系だよね。ポツポ。割りとあだるていーな。似合つてるけどさ。

私？ それ系はタンスの奥深くに眠つてるとだけ言つておこう。やつぱり助言は聞くもんだね。

「そもそもサラシがあんまりだからって、あなたたちが選んだのだけれど。私は徳用で良かつたのに……」

「私と同じで、中々合うサイズがなかつたでしょ？ 桃ちゃんもそう言つて、痛い目見たんだから」

「そこは気合いで……」

「気合いでどうこうなるものじやないからね？」

「そうだねー。皆、私みたく子供用で間に合うような量産型○クジやないもんねー。私もガ○ダムになりたいねえ」

「オレが○ンダムだ！」とまでは言わなかつたら、「ザ○とは違うのだよ。○クとは！」位は言つたかった。

今からでも間に合う？ 無理でしょ。

「それはそれでエース専用な氣が……。パイロットでちょうどいませんでしたつけ？ ○い彗星つて人」

「ああ、それつてシャ○？ 確かロリコン疑惑なかつた？」

「そういやいたね、そんな人。

私も知つているのは話の顛末くらいで、実際に見たわけではないが。

ポツポにいたつては話に全くついてこれないらしい。

そりやそりや。傭兵やつてる人間が、テレビ点けてまで戦争アニメなんか観たくないよね。

「……何だか嫌なエース専用ね。エースというよりボトムじやないかしら」

「微妙に別な作品が混じつている氣が……、なんなら国の代表にまでなつたよ？」

「それ本気？　衰退^ロと変化^リを許容^コできない人間がトップになるとか、口クなことが起きないんじや……」

結末については知らないのでなんとも言えない。種類が多くすぎて、どれがどれだか分からるのが正直な感想である。

……どうしてこんな話してるんだっけ？

「なんでガ○ダムの話になつてんだろう。えーと、ポツポのお金だけど、これは保留ね。ちょっと経緯が経緯だし」

「私がいいって言つてるんだから、素直に使えば良いのに」

「もうちょいあれば、いつそ本体を買ってもらつて個人所有してもらうんだけどさ。完全に一からとなると、税金とか登録料が必要になつて多分足りなくなる」

「じゃあもう一回稼いで」

「鴉羽ちゃん？」

「冗談よ副会長。だからその笑顔は止めて、お願^イい」

この様子を見るに、しばらく無茶はしないだろう。

仮に足りたとしても、今度は燃料費や整備パーツが必要になるから運用コストを考えると微妙なところだ。

……でもあれ？ ポツポがこんなことをしてきたということは？

いいや、止めておこう。取らぬ狸のなんとやらだ。

さてどうしたもんかね。

改めて資金運用に頭を悩ませていると、ドタドタと階段を掛け上がる音が聞こえてきた。しかも段々とこちらに近付いてくる。部屋にいる全員が、訝しげに出入口を注視する。

ノックもなしに勢いよく扉が開け放たれた。

「かいちよお～！ 柚子ちゃあ～ん！」

猫山が！ 猫山があ～！」

騒音の主は広報の桃だった。平時でまとつていて、厳格な仮面をかなぐり捨て置いて、泣き叫びながらこつちに駆け寄つてくる。

「カワシマ～、ちょっと落ち着い……あ」

最初は桃の様子に面食らつたが、小脇に抱えられている少女を見てハツとなる。

「桃ちゃんどうした……あ」

柚子も同じだつた。一瞬遅れてサーツと顔が青くなり、意味もなく視線をさまよわせた後、対面のポツポの両肩を掴んだ。

あちこちが跳ね回つている銀の短髪と、桃に抱えられている私よりも小柄な身体。顔を見なくとも、これに該当するのは大洗の学園艦では一人しかいるまい。頭しか見えないせいで、余計に首を掴まれた猫のよう見えた。

その彼女が、のそりと顔を上げる。その先に居るのは「よう、首輪付き。やはり飼い主がいないと寂しいか？」

「……レイヴン、介護がないようだが、歩けるのか？」

世の中には絶対に混じり合わないものがある。それをこの二人が、今年の入学式当日にその身をもつて教えてくれている。

相反する白と黒は、唯一の共通点である、血のように赤い瞳を通して、互いの意思を理解したのだろう。

「今からでもあの時の続きをしてもいいぞ?」

空気の色が変わつたように思えた。ただ視線がぶつかつてゐるだけだというのに、つばぜり合いのような緊張感が、あたりに飛び散つてゐる。

ところで諸君、同族嫌悪という言葉を「存知だろうか。あるいは、「喧嘩は同じレベルの人間の間でしか起こらない」でもいい。

「……モモ、いい加減おろしてくれ」

「……柚子、どうか手を放してくれ」

「……とりあえず2人のお茶を淹れようか。どうせネコちゃんも似たような用でしょ?」

マヨネーズが生まれた日 〈後編〉

「んで、猫山ちゃんも資金を調達して来た。スゴイね。息ピツタリじゃん」

私の言葉に揃つて舌打ちする2人。勿論ポツポと猫山ちゃんである。

「馬鹿の一つ覚えか。老いぼれ鴉」

「獣は学ぶことを知らんらしいな」

「うん、キレイにブーメラン投げ合つてるよね」

「コイツと一緒にするな」

こみ上げて来た笑いを必死に噛み殺す。予想通りとは言え、これを打ち合わせなしでやられては腹筋に悪いことこの上ない。ここまで来るとガワが違うだけの同一人物じゃない?

私の内心を読み取ったのか、ポツポは抗議するような視線を私に投げつけたがそれも一瞬、再び猫山ちゃんを睨む。

「首輪付き、お前はどこで何をやつてきたんだ?」

「……適当な破壊工作」

「まさかと思うがこの施設じゃないよな?」

タブレットの画像を見せられた猫山ちゃんはしばらく画面を眺めると、何も言わず自分の端末を操作し始める。

「逆に聞くが、貴様が襲撃したのはここか?」

「……なるほど」

互いの画面を見せつけ合うと、申し合わせたかのようにそれをテーブルに黙つて置いた。

「あ。喧嘩はなしだよ。せつかく停学を回避させた私達の労力が水の泡になるからね」

「チツ」

予感がしたので釘を刺すと、不満げに再び舌を鳴らす2人がいた。やつぱりそのまま殴り合う気だったようだ。

「一体どうしたの鴉羽ちゃん?」

「報酬が減った理由が分かつただけだ」

柚子の問いにタブレットの画像を一瞥すると、すぐに機嫌が悪そうに目を逸す。

「猫山もか？」

「……ああ」

「少しかりるぞ……、会長、何を笑っているのでしょうか」

「いや、まあ。当てずつぽうだけど、2人とも言つていい？」

つられて桃も猫山ちゃんのタブレットを覗いた。そして、笑いを堪え切れていない私を訝しがる。

なんとなく、ホントになんとなーくだが結果を予想出来た私は、答え合わせの許可を取ると、心底イヤそうな顔で聞こえていない振りをする2人を尻目に答えを言う。

「お互い敵対してゐる会社の破壊工作を成功させたせいで、報酬減らされるとか面白すぎでしょ。ちょっとコントにしてもベタ過ぎ、ハハハつ、ごめん。笑いが堪え切れない」

啞然としている柚子と桃の顔もツボに入つてしまつてゐる。そしてポッポも猫山ちゃんは、白い肌を赤くさせつつも睨み合いながら、勢い良く立ち上がつた。

「一発殴らせろ」

「ちょっとストップ、ストップ！」

「会長、笑つてないで2人を止めてください！」

再び2人が殴り合いの姿勢を見せる。本来なら仲裁しなくてはいけないのだが、なんというか。

「ムリムリ！ 笑いがとまんない！」

「なんでこの状況で笑えるんですか！」

「大丈夫だよ柚子。だつてこの2人……」

その時生徒会室にノック音が響いた。全員の動きが止まる。

「ククッ、どーぞー」

「失礼しまーす。つてなんじやこりや」

「ようこそ卵ちゃん。点検の結果報告だね。気にせずどうぞ」

この混沌とした場に現れたのは諸星玉子。西住ちゃんと一緒に黒森峰から転校して来た戦車道経験者。整備を手伝つたのか、下のツナ

ギは土と油で汚れていて、上は最早トレードマークとなつたよくわからぬヒーローモノのTシャツ姿だ。正直言つて、ダサい。

「とりあえず交換した部品と、そろそろ取り替え時期になる部品一覧だ。練習ならしばらく持つが、試合となるとまとめて買い換えないとい引っかかるぞ」

「おーけー、ありがとう。あとはこっちでやつとくよ。お茶でも飲んできな」

「いや、みほ達を待たせてるから……、さつきからずっと見てるけど何か用か?」

ポツポと猫山ちゃんを、不審に思つた卵ちゃんが声をかける。2人は金縛りにあつたように固まつてゐる。猫山ちゃんは知らないが、呆然とするポツポなんて相当レアじやなかろうか。

「そういうはじめましてか。ポツポ、こつちは諸星玉子さん。黒森峰からの転校生」

「モロ……星? その……Tシャツ、どこで」

「お。あんたコレの良さが分かるのか。自分で縫つたんだぜ。カッコいいだろ?」

「え、ええ……」

まじまじとつま先から髪の毛先まで、ポツポは舐め回す様に見ている。

不羨な視線に居心地悪そうにしている卵ちゃん。非難の言葉が出ないのは人がいいからかヘタレだからか。多分どつちもだ。

「……ダン……、モロ?」

猫山霧音がそう呟いた。私は幽霊でも見た様な顔、というものを見た。初めて見た。

「そういえば、明日は鴉羽先輩が見に来るらしいよ」

「からすば……先輩?」

「ああそつか。みほりんは知らなくて当然だよね」

帰宅の準備中に武部さんが、思い出したかのようにその名前を呟いた。

いつ会ったか記憶を辿つてみたけど、入学者向けのパンフレットに載っていたことしか覚えていなかつたため、把握に時間がかかつてしまつた。

武部さんの優しいフォローに、やつぱり自分は抜けてるなあと思いながら、同時に知つて いる情報を頭の中でまとめる。失敗は誰だつてするからリカバリ―は迅速に。

……うん。確かに生徒会の会計の人だつたはずだ。でも戦車道の活動中に会つたことはない。ちょっと不思議だけど、会計ということは裏で予算確保の為に尽力してるのかな？

「生徒会会計の先輩だよね？」でも、まだ会つたことは無いような……」

「西住殿の言うとおりです。4月から全然姿を見てませんよ？」
「元々生徒会の方々の中ではあまり表には出ない方でしたけど、何かご病気でも患われたのでしょうか？」

秋山さんの言葉が正しいなら、それは間が悪かつたにしてはあまりに不自然で、ともすれば五十鈴さんの言うとおり病気か、あるいは家庭の事情か。と思ったが、言い淀む武部さんを見るに違うようだ。周りを伺う仕草をしたあと、声を落として事情を話してくれた。

「あくまで噂なんだけど、新入生と喧嘩して謹慎処分になつたって……」

「え……？」
「まあ……」

手を口にかざす五十鈴さんと一緒に驚く。角谷会長を筆頭に強引な所はあれど、生徒会の人はそんな武闘派ヤ○ザみたいなことはしないと思つていたから。

ただし逃げ道を塞ぐことはするけど。

(もしかしてヤ○ザより厄介なんじゃ……)

「そんなバイオレンスな方でしたつけ？ 確かに強硬なところはありましたけど、暴力に訴える方ではないと思いますよ？」

「そうそう！ 私も信じられなくてさ！ 落ち着いてて色気があるて、冗談も言えて、頼りになる大人の女つて感じで……ちょっとショック……」

そんな大声で反応すると声を潜めた意味がないんじゃ……。こういった影のある話をして、イヤらしさを一切感じないので、あまり関係ないと言えば関係ないのだけれど。そこは武部さんの人徳である。

話を戻そう。実際に会計という職務を考えると、2人の抱いている人物像は大きく間違つていらないと思う。そんな人が新入生と喧嘩するということは、ますます考え難い。

(ううん、逆かな。そんな人だからこそ手をあげちゃったんだ)

となると鴉羽先輩の地雷を踏み抜いた新入生の子が気になった。

「武部さん、相手はどんな子だつたの？」

「分かんない。その新入生が遅刻してきたせいで見てた人がほとんどいないの。だから私も噂しか知らなくて……」

「それなら見たぞ。小柄でやたら白いヤツだつたな」

声の主は冷泉さん。意外な発言者に皆の視線が集まる。

「マコ、それホント？」

「ん。小学生みたいな身長で鴉羽先輩と殴りあつてた」

「殴り合いですか？ 取つ組み合いではなく？ ……鴉羽先輩って170位ありましたよね……」

冷泉さんは秋山さんの質問にゆっくりと頷く。

「ああ。それもグーでだ。回し蹴りとひじ打ち、よくわからん投げ技まで使つてたぞ」

「なにそれちよつと観てみたい。詳しく」

「鴉羽先輩は武道も嗜まれてたのですね……。でしたらあの佇まいも納得です」

食い気味の武部さんと矛先がどこかズレた五十鈴さん。もちろん私も含めて、周囲も興味津々だ。近くにいる人達が聞き耳を立ててるのがよく分かる。

そんな野次馬根性丸出しの私達を微妙に煩わしく思つたのか、冷泉

さんは一つため息を吐いたが、一つ一つ記憶を手繰るように話してくれた。

「私もよく分からんが、新入生と先輩がなんか言つたと思つたら、お互の顔を殴つてた。先輩は鼻血が出てて、新入生の方は口の中を切つてたみたいでな。2人とも適当に血の始末をしたら……、なんだ。んー……あれば、全身を使った高速アルプス一万尺を始めたんだ。一手間違つたら意識が刈り取られるようなやつ」

「そんな殺伐としたアルプス一万尺、誰もやりませんよ……」

「最初の一発以外クリーンヒットが無かつたからな。じゃあ、はじめの○歩の間柴 v s 沢村の序盤みたいなのだ」

「その例え、分かる方何人いらつしやるんでしょう。分かりやすいですけど」

秋山さんの苦笑いに、例えが分かつてしまつた私はなんとも言えない気持ちになる。小学校低学年位までは父に連れられて床屋に行つており、待つている間に置いてあつた漫画を読み漁つていたため、その辺りの話を覚えているのだ。家では少年漫画を読めなかつたのもある。何巻かは姉が頑に読ませてはくれなかつたけど。激しい暴力描写があるところ省いてくれたのだろう。

（あれ？　じゃあなんで間柴 v s 沢村の試合ちなみにまほとしては鷹村V S ホーク戦は迷つたを覚えてるんだろう？）

「そんなこんなでしばらくして、広報の河嶋先輩と、そどこが来てその場は収まつた」

「じゃあ本当なんだ……」

「私が知つてるのはこれだけだ。その場では口止めされたけど、本人が来るなら知つてた方がいいだろう。今日あたり生徒会に顔出してるんじや「玉子先輩が危ない」うおつ……！」

体が勝手に走り出していた。武部さんが何か叫んだがよく聞こえなかつた。

点検の結果を伝えに生徒会室に行くと、先輩は言つていた。そんな危険人物に、あの人畜無害の鈍感でいつもは頼りにならないおつちよこちよいのヘタレのあの人が出くわしたらどうなるか。狼の餌場に

現れる殊勝な羊もいいところだ。

(超殲滅戦用の白兵戦装備どう見ても作戦遂行中の特殊部隊にしか見えないを回収していくと……10分。間に合つて!)

「ふーん。じゃあ、2人と知り合いなんだ」

「ま、まあな。転せ……転入先にいるとは夢にも思わなかつたがな」
ようやく落ち着いたらしい卵ちゃんが事情を話してくれた。聞くに昔、それぞれ違う旅行先で出会つたとのこと。それがまさか高校で再会して、ましてや、その知人2人が知り合つていたとは偶然にも程がある。

「それにしてもまたアナタに会えるとは思つてなかつたわ。ダ……玉子」

「それは俺の台詞なんですけど。レイ……なんて呼べば良いでしようか?」

「そうね。昔のあだ名でも良いけれど……唯明が良いかな」「了解した。ユメ……さん?」

恐る恐る名前を呼ばれたのか不服らしい。ポツポはこれまた珍しく、分かりやすい不満げな顔をする。

「敬語は無しでいいわ。呼び捨てでどうぞ」

「いや、ですけど……んじや、またよろしくなユメ」

「こちらこそよろしく」

両者が心底嬉しそうな笑顔で握手をした。中々に感動的な光景だ。現に柚子は軽く涙ぐんでいる。涙ぐみはしなかつたが私と桃も、思わず軽く拍手をしていた。

だが、この場に1人だけ、それに納得していない人間がいた。

ペチリと、握手している手をはたき落とされる。それは言わずもがな。

「アタツ！」

「首輪付き……、お前は一体何をしてるんだ」

「アンタには関係ないだろう。それより、オレには何もないのか」

「何もないって、もう俺の上に座つてるじゃないか……」

さつきの握手の時に「邪魔だなあ」と思つていたのは私だけではないはずだ。

空いていたパイプ椅子に座つた卵ちゃんの膝の上へすると、さも当然の様に彼女は移動したのである。それも卵ちゃんが軽度の錯乱状態になつていて最初の時からずつと。

むしろ必死にスルーしていた我々を誉めて欲しい。あの桃ですら空気を読んだのだ。

「お前、こんなキヤラだつたのかよ……？」リンクス

「霧音だ。霧音が、いい」

「分かつた。霧音」

「ん。もう一回」

「霧音」

「もう一回」

「霧音？」

「もつと」

「霧音……」

「どこのバカップルだ、お前達は。首輪付きはいい加減離れろ」

誰が最初に突つ込むか、という逆〇チョウ俱楽部現象に終止符を打つたのはポツポだつた。

内心では一番突つ込みたかったに違ひない。むしろよく我慢した方だと思う。

「断る」

「……そんな迷いのない目で言われてもな。玉子が困つてるだろう」「え、うん？まあ、体温たけえなとは思つてるけどよ」

それつて暑苦しいって意味じやん。という言葉は口には出さなかつた。直接言えないのはなんともらしい。でも、流石に猫山ちゃんも意味は察したようで、頭を傾けて不安そうに、下から卵ちゃんの顔を覗き込む。

「オレは邪魔か?」

「いや。あー……、邪魔、ではないな」

その顔と低身長のコンボで落ちない男などいなかろう。女であるワタシですら断りにくい。ヘタレが相手なら尚更だ。

「それは禁じ手だな。このヘタレがそう尋ねられて領けると思うか?いいから離れてやれ」

「イヤだ」

「オイオイオイ。何おつ始める気だお前ら!」

しかしそこはポツポ。そんなものはきかぬと引き剥がしにかかる。が、当然抵抗されるわけで。卵ちゃんの膝上では残像を伴うハンドスピードで、無駄にハイレベルなキヤットファイトが始まる。片方は鳥だけど。

一見、防衛側の猫山ちゃん不利かと思われたこの一戦、意外なことに互角の様相を呈していた。どうやらポツポが椅子役を気遣つて、攻めあぐねているようだ。

「早く止めてくれ!」

悲痛な叫びだ。いくら加減しているとはいえ、目の前でそんなことをされたら生きた心地などしないだろう。

「会長、助けてやつた方がよろしいのでは?」

「んー?……大丈夫じゃない?」

でもそれは当人の感想で、第三者から見ればただの喜劇である。

「……そつか。桃ちゃん、お腹空かない? 実は試合の帰りにケーキ買ってきたの」

「だから桃ちゃんはやめろ。生徒が困っているのを見逃す訳には

……」

柚子も分かつてくれたようで、渋る桃を宥めながら冷蔵庫を開ける。渋い桃とか需要ないし。

……審議中。

んく、楽しみだなあ、干し芋モンブラン（棒読み）。

そここの栗の代用品の安物クリーム部分まで栗を使うとコストがかかるため代わりにサツマイモが使われることもとか言つた奴、お前は

リス別に栗だけを食べるわけではないかあ？ 淫〇栗とリス。完全にこじつけであるかあ？

よ？

証拠ならほら、C.〇栗の学名はC a s t a n e a c r e

n a t a だがそこにコー〇ギアスのヒロインは一切関係ない。つまりr y) だつて〇ツチじやんC.〇ファンの皆さん本当に申し訳ない。心より謝罪申し上げます。栗じゃないけどC.^{ビック}〇レモンもはやなにも言うまいとか流行りのメス〇キアピール昔レモ〇ピープルという幼女メインのアレな雑誌があつた。ちなみにゼオ〇イマーが連載されてたり、エル〦ー・ブルの元ネタになつたりしている。だがどう考へてもr y) でしょ。私にはとても飲めないわー多分C.〇レモンも貴方には飲まれたくないと思う。万が一、サント〦ー社員の方で読まれている方がいらつしやつたら本当にすいません。

「お前達、俺を見捨てる気か!? 後生だから助けてくれ！ ホント、後生だから！ 俺が保証するから！」

見捨てるとは人聞きが悪い。君を信用して任せているのだよ。

「そうだ。喧嘩中の2人？ それ見逃してあげる代わりに、戦車道履修ね。 車長は卵ちゃん。よろしく♪」

「はあ!? お前、これ見てそれ言うとか頭がイカれたか? 大体コイツらが俺の言うことを聞くわけ……」

「別にいいぞ」

予想通り快諾する2人。未だに手は分身してるけどね。理解して

いないのは当人と桃だけだつた。

「マジかよ。じゃあ今すぐそれをやめろ」

「だが断る」

「……聞いたよな？ 早速命令違反だぞ。ホントに良いのか？ これで良

いのか？ そもそもコイツらに命令とか、命が幾つあつても足りな

……、あ、なんか胃がキリキリしてきた

「へーキへーキ。そういうのは期待してないから」

信用はしてるけど、信頼はしてないんで。

「じゃあなんで俺を車長にするんだよ！」

その時、卵ちゃんのシルエットが傾いた。声を張り上げた時に変な

言いがかりじゃないかつてそ Rodgers だ
言いがかりじゃないかつてそ Rodgers だ

力が入ったようで、パイプ椅子のバランスが崩れてしまつたようだ。

「へつ？」

「ん？」

「ヌツ？」

そこから先はスローモーションのようだつた。

倒れる卵ちゃんに巻き込まれた猫山ちゃんが機敏な動きで身体を捻る。いわゆる相撲の庇い手の様なことを行うために、卵ちゃんの肩の辺りを抱き抱えた。

ポツポはその倒れかかって振り上がつた足を掴む。結果、どうなつたか。

「ムゴツ」

「んツ！」

「……んほおこのダン・モロたまんねえ……」

倒れた卵ちゃんの顔の上に猫山ちゃんが座り込み、彼女の脚の間に

はポツポが顔を埋めているこの状況が生まれた。

……これつてどこのt○—l○v eる?

「ムゴツ、ムゴムゴ、ンゴオ！」

「あまり……、しゃべるな……！」

「……気が付かれないように静かに深呼吸をしている」

そしてこの急展開に突つ込む暇も与えず、生徒会室の扉がビターンと、開け放たれる。

「先輩！無事ですか！」

一瞬の空白。

ここにアサルトライフルを携えた、ダー○・ベイダーミみたいなマスクを被つた不審者が飛び込んだせいで、生徒会室の力オス値は計測不能になつた。私の頭は一時的に考えるのを放棄したが、黒塗りの不審者はそうではなかつたようだ。

襲撃者が引き金を引くのと、ポツポと猫山ちゃんが飛び退くは同時

だつた。アサルトライフルをバラ撒かれ、私の悲鳴より早く、筒状のものを放り投げる。

「はあ？」

「へつ？」

「んなつ！」

「ほう」

「ちつ」

「……みほか？」

そこから煙が吹き出して、あつという間に視界が塞がれ、生徒会室が煙で満たされる。煙感知センサーを切つていて良かつた（良くない）杏が生徒会室で料理するため。

「先輩！逃げますよ！」

「みほ！こりや一体どう言うことだ！」

「いいから、今は脱出します！なんで先輩はいつも虎穴の前でウロウロしてるんですか、ヘタレなのに！」

「やべえ。みほにまでヘタレって言われた。すっげえ泣きたい」

白い世界で声が響く。マスクのせいで声はくぐもっているが、襲撃犯の正体は西住ちゃんらしい。

……ええ（困惑）……？

「逃がさん」

「とりあえず換気か。窓を開けますか」

「けほつ、けほつ。なんで鴉羽ちゃんは平氣なの？」

「慣れてるから。それにしても、久し振りに本氣で避けたな……いいセンスそれは伝説の鴉ではなく蛇の方であるだ」

「こほつ、感心してる場合か！」

呆けてる場合ではなかつた。柚子はともかく、桃は指示を出した方が安心するだろう。

「柚子は換気扇回して、カワシマは西住ちゃんを確保」

「襲撃犯は問題ないわ。獣には、おあつらえ向きの状況だから」

「……なるほどねえ。じゃあカワシマは出入り口に立つてて。立つてるだけで手出しはしなくていいよ」

指示を出し終わつた後は、ポツポと2人がかりで生徒会室の窓を開いていく。あとは煙が抜けるまでの少しの間、2人揃つて手持ち無沙汰だ。

「で、卵ちゃんとはどんな関係?」

「……デカイ借りがあつてね。昔、最期まで付き合つてもらつたの」
気になる言い方だが、深くは踏み込むまい。恐らくお互に不幸になるだけだから。

「ふーん……、猫山ちゃんも同じ理由?」

「なぜアレが出てくるかしら、……多分そうね」

「そう。結構情には情で返すタイプだよね、ポツポは」

「寝言は寝てから言つて頂戴。ご存知の通り、大抵のことは金と力で解決してゐるでしょ」

ただ、これに関しては、終わらせたくなかつた弱い自分がいるだけ。
最後の言葉は聞かせる気はなかつたのだと思う。

これは何と言うべきか。ポツポは何故か複雑に考えてゐようだが、それはきつと、もつと単純な。

「なに拗らせてんのさ、ポツポ。そんな難しく考える必要は「先輩を離してください!」：流石。あの煙の中、よく捕まえたね」

やつと部屋の中が見渡せる様になつた生徒会室、その出入り口付近では、西住ちゃんと猫山ちゃんが件の人物を巡つて綱引きをしていた。

余程卵ちゃんを譲りたくないのか、2人とも決して彼女を放す気配はない。

「お前が、離せ。それと、マスクを外してもらおうか」

「イヤ、です。こんなヤ○ザの事務所みたいな所に、先輩を置いていけません!」

「俺を巡つて争うのはやめ、グエツ」

蛙が潰れたような声がした。よくよく見ると、2人の腕が肺と胴回りを締め上げていた。あれでは息が苦しかろう。

あと西住ちゃん。確か文科省に反対してゐるつて意味では反社会的集団だけさ、今のあなたも完全にヤ○ザの鉄砲玉だからね?

それと、西住ちゃんの実家を堅気だと思える人間は、全国でもごく少数だと思うんですけど西住流は戦車道における最古、最大の流派であり、健全な教育研究団体です。（名推理）。

「極つてる、極つてるから！あ、ホントに落ち」

「きやつ……」

「しまつ」

ついに酸素が足りなくなつて、膝に力が入らなくなつた卵ちゃんが崩れ落ちた。猫山ちゃんは反射的に飛び退いたが、最後まで離さなかつた西住ちゃんの方は卵ちゃんの上に倒れ込む。

鳩尾に頭突きをいれる形で。

「……クソガ」

それがトドメとなつた。最後にそう咳いて、卵ちゃんは意識を失う。

換気扇の回る音だけが聞こえる。

西住ちゃんがマスクを外した。

「あの……私、先輩だけもらつて帰りますね」

「ほうほう。……ヤ○ザの事務所にカチ込んで、ただで帰れると思つてんの？」

「……何本で先輩を返してもらえますか軍神はT D N 池沼とは訳が違う（迫真）繰り返しますが、西住流そのものは健全な教育研究団体です。？」

「……どこからまな板と包丁取り出したみほの人力ゼ○システムが示した未来にそれがあつた！ まな板の上に腕を置くな！ あと目力こいつには、やると言つたらやる……『スゴ味』があるツ！ がスゴい！ 怖いからマスクつけ直していいよ！」

あとポツポと猫山ちゃんは「見込みがあるな」とか「悪くない」とか言うな！ 勘違いの收拾がつかなくなるじやん！

このあと追つてきたあんこうチームとも一悶着があつて、帰るのが

深夜になつたり、タカシくんの告白イベントがあつたり、誘拐事件があきて確認できるだけで3人の修羅が生まれたり、性転換薬なるものをチームマヨネーズが飲んだりしたりと、色々な出来事が起きたのが、これだけは語らねばならない。

この物語は『ガールズ&パンツァー』。流れるのは汗と涙と戦車のオイルくらいで、決して血は流れなかつたし、これ以降、鴉と山猫が戦場に現れるることは二度となかつたと言う。

「会長さん、早く決めてください。それとも貴方が直々に腕を落としてくださるんですか？」

！」

「腕エ!? 何もいらないからとりあえず包丁とまな板をしまいなつてないが」

「これが?」

「なんで生徒会室にそんなの持ち込んでんのお! ヤ○ザもスプラッタも禁止イ!」

……ないつたらいいのだ。

……多分。

はじめての戦車

「んで、戦車はどうするんだ杏？」

「無難に火力と装甲重視かな？ 今のところウチに重戦車はないし、最低でも中戦車は欲しいでしょ」

生徒会室で戦車のカタログやチラシをペラペラとめくる2人。角谷杏子と諸星玉子ことダン・モロは、言葉のとおり購入する新戦力を相談していた。ちなみにここにいない面子は練習に行っている。猫山霧音はカメさんチームの砲手として、鴉羽唯明はウサギさんチームの操縦士として、それぞれレクチャーを受けている。

「これなんてどう？ p40の中古。実際は中戦車だけど、火力を考えればこの値段は悪くないと思うんだ」

「……やめといた方がいいな。ただでさえトラブルの多い p40だ。多分買つて早々、故障の可能性が高いぞ」

見てみると、特価と書かれたチラシの片隅に書かれたスペック表を玉子が指差す。

「機関部が初期のイタリア製ガソリンエンジンだ。信頼性はもちろん、壊れても予備パーツを手に入れるだけで一苦労だな、これ」

「ありやりや。やっぱり値段相応か」

「中々良いのが見当たらないねー」と呟きながら杏は次の候補を探そうとしたが、そこに待つたがかった。

「正直言うとよ。今、日本国内の市場に出回つてる有名どころの中古は、ほとんどが難ありだ。物が物だから状態が良いのは、最初に金と実績のある所に打診するからな。具体的に言えばティーガーが上がると、まずは西住流か黒森峰に話が来る」

頬をかきながら、渋い顔で玉子が現在の日本戦車道について簡単に語り始める。曰く、一時期廃れてしまった影響で、良質な車両が海外に放出されてしまつたこと。曰く、国内で流通している部品も、殆どが固定客向けで、一般には有名どころでも中々出回らない等々。

「有澤重工も頑張ってるみたいだけど、その1社だけじゃ限界がある」「有澤重工だけでそんなに造つてるわけ？」

「日本で製造された戦車の80パーセントは有澤重工だぞ？」 戰車

道用車輛の生産ライセンスを全部取つてるのはあそこくらいだ。海外産のものでも、消耗品は有澤製に置き換わつて。社訓が世界全ての戦車と榴弾を作る、だからな」

一強が過ぎて色々と新規参入が滞りがちなんだよ。

呆れているような、感心しているような、ため息混じりの言葉が次々と出てくる。話を聞く杏も苦笑いせずにはいられなかつた。

有澤重工は極めて高品質な戦車を提供しているが、そのせいで国内市場における海外製品の悉くを駆逐、流通数が絞られてしまい、出回るルートが固定されている状況が続いている。

値段は海外製品に比べて負けているものの、それも品質を考えれば、採算がとれているか疑うレベルであり、その堅牢さと安全性は試合における事故率を大幅に減少させた。人命に関わるような製品トラブルに関しては驚異の0件。

流通数の減少も、かえつて厳格な管理体制を一から制定することを容易にさせ、結果的に戦車道は安全なスポーツという印象を世間に与えることに成功。日本の戦車道を復活させる要因の一つとなつている功労者なのだが。

ちなみに自社製品の耐久テストは、実弾を撃ち込むというパワー厨おじさんも唸らせる本格派、試合用弾頭の安全性テストにおいては社長自ら標的になるという漢仕様である。

「ちなみに卵ちゃんは何か伝手があつたりする？」 その黒森峰の選手でしょ」

お金のない小国が独立維持するつて、こんな感じなのかねー……ちよつと違うか、と妙な感慨を抱いた杏だったが、すぐにそれは振り払つた。

おあつらえ向きと言わんばかりに、黒森峰から来た2人がいるのだ。か細い、本当にか細い糸だが、まだ繋がつていて。

「1軍半の選手にそんなものあるわけないだろ。まほやエリカ、こつちに来る前のみほには、あつたかも知れないと」

「じゃあ何なら良いのさ。競技用の新品だと、搬入まで半年はかかる

じゃん。費用も嵩むし」

「そこなんだよなー。いくら良いのがあつても間に合わなかつたら意味ねえし」

玉子が唸りながら、時間と妥協と予算を抱き合させた自分の考えを絞り出す。

「一番妥当なのは、本土の中古市で試乗してから買うことだな。狙い目はM4シャーマン。元々の生産数が多い分、状態の良い物が流れることも稀にある」

「B○○K○FFの古本に紛れてる貴重本みたいに?」

「そんな感じだ。あと、あの2人の意見も聞く必要はあるけどよ。説明は俺からする」

「じゃあ今出来るのは、次の寄港を調節する位、か」

「疲れたー！」と、杏がチラシを盛大にぶちまけた。

「……ちゃんと片付けろよ。大体、何でこんなに焦つてんだ」

玉子の疑問をのせた冷ややかな視線は気にもとめられず、杏は半笑いで干し芋に手をつける。いつもの「干し芋食べる？」からのやり取りを経て

「出来るだけ爪痕を残したいのさ。校内に、私が西住ちゃんの銅像を立てるのが目標かな？」

口から干し芋をぶら下げながら言われても、どこまでが本気かは分からない。観念したように玉子は息を吐いた。

「止めはしねえけど程々にな。あいつらの訓練もとうの昔に終わってるだろうし、俺は行くぞ」

「お茶位飲んでつてもバチは当たんないと思うよ？」

「俺が良くて2人に付き合つてる回りが心配なんだよ」

真面目だねー。だから車長にしたんだけど。

口に出さず表情も半笑いのまま、席を立つ玉子を見送るつもりでいたが、その対象が扉の前で「あークソ」と呟くと、急に踵を返した。

「真面目だねー。早くいってあげなよ」

「うるせえ。こっちの片付けの方が楽なだけだ」

「ありがとう。いいお嫁さんになるよ」

わざわざ床に散ったチラシを拾い上げる姿に、嫌がるだらうなー、
と思いつつも口にしてしまった。やつぱり非常に嫌そうな顔をした。

事実、猫山霧音が一発で目標に命中させて河島桃の心をへし折つたり、鴉羽唯明がM3リーでトップスビードでの多角形コーナーリングを行つて、大野あやの眼鏡を叩き割る等、大変愉快な練習風景が広がつていたのだが、彼女達が知るのはしばらく先になる。

生徒会室の電話が鳴つた。

「もしもしーし。こちら大洗女子学園生徒会室ー」

「ご機嫌よう。角谷生徒会長」

「お、アッサム？ 珍しいね。こういうのはダージリンの仕事だと思つてたんだけど」

予想外の所からきた意外な人物の電話だつた。聖グロとの練習試合もその手続きも無事終了しているし、仮に何か用があれば、顧役であるダージリンが電話をかけてくるはずだ。

退出しようとすると玉子に「大丈夫」とジエスチャーを送りながら話を続ける。

「申し訳ありません。今回は危急の用件として。ダージリン様ならWiteに富んだ前置きを話すのでしようが、何分浅学の身なので、どうかご容赦を」

「気にしないでいいよ。次からはアッサムが連絡してくんない？ そつちの方が楽だし」

「それはダージリン様が拗ねてしまうので難しいですわ」

「そつか、残念。用件は？」

「……大変申し上げにくいのですが……」

ところ変わつて聖グロリアーナ女学院、その戦車道演習場にて。

「ねえペコ、こんな言葉を知ってる？ 『事実は小説より奇なり』

「イギリスの詩人バイロンの言葉ですね。格言というより慣用句ですし、バイロンが実際に言つたわけでは無いようですが……」

いつもなら今は戦車道の時間。ダージリンとオレンジペコは

チャーチルに乗り、聖グロ伝統の美しい隊列の中心で指揮をとつていることが常だ。が、今日に限つて言えば、演習場がよく見える小高い丘でティータイムに興じていた。

「私は今までバイロンが『空飛ぶモ○ティ・バイソン』と『ばんてふのF A 残留』を見たことが無いからその言葉が言えたと思つてたの」「ええと、すみません。『モ○ティ・バイソン』はともかく、『ばんてふ』

のことはよく知らないのですか】

それを聞いたターリングは紅茶を一口飲んでカツーをソーサーに丁寧に置いて一言。

「『ばんてふ』は横浜市民の必修うこ。必ず圖べてらきなさ、二

「わかりました」

今のはちょっと本気でしたね、と思いながら紅茶のおかわりが必要かどうか、さりげなくカップの中身を確認する。

まだ必要は無さそうだ。

「なんでしようダージリン様」

ずつと気になっていたのだが、決してオレンジペコはそれを指摘することはなかつた。言つてしまえば、この2人だけの空間が壊れてしまうから。

例えテーブルの上の無線機から、淑女らしからぬハイテンションな笑い声が聞こえても、狂喜するV型12気筒リバティエンジンの唸り声が演習場に響いても、履帶を破壊されたマチルダ隊の骸が眼下に広がつても決して。

今オレンジペコは10代半ばにして、激しい喜びがない代わりに、深い絶望もない、植物の心の様な平穏な人生を求めていた。幸いまだ、モナ・リザの手を見ても興奮するような趣味はなかつたが。

「どうして戦車が離着陸の練習をしてるのかしら」

ジャンピングタンク用のロケットエンジンを装備したクルセイダーが、白旗を上げたマチルダを華麗に、けれど醜悪に飛び越えるのを見てふと、「そいえばイギリスの国教はプロテstantでしたつけ？」とオレンジペコは思ったが、すぐに考えることをやめた。色々と苦笑いしか出来ない。

いつものダージリンならこれを見て、殺人ジョークを食らったみたいに笑い出すのだろうが、今回ばかりはマチルダ隊の惨状が酷すぎて、形のいい眉の片方を微かにひきつらせるだけだった。

そんなことなど露知らず、クルセイダーのキューボラから身を乗り出して興奮する、聖グロ生の姿が2人の視界に飛び込んできた。彼女は語尾さえ何とかすれば淑女になるとでも思っているのだろうか。

多分その「ですわ」は、ウナギのゼリー寄せに蒲焼きのタレをかける位手遅れだ。

「最つつ高ですわ！　あなた達、聖グロに転校しませんこと？」

「嬉しいのだけれど、先約があるので丁寧に断らせてもらうわ」

「俺もだ。……引っ付くのはやめろ」

「えく、いいじゃ御座いませんか。そうだシロさん！　転校がダメならウチの子になりませんこと？　ワタクシ末っ子ですから、妹に憧れてましたの！」

「俺は犬猫扱いか……。そもそもそう簡単にいくわけないだろう……」

「大つジョーブですわ！　ウチは大家族ですから、今更1人2人増えた所で余裕のヨツちゃんで御座いますわ！」

「試しにニヤーとでも鳴いてみたらどうだ、シロちゃん？」

「確かに、いつも猫被つてるじいさん鴉には無い話だな、クロちゃん」

「あら？　クロさんも誘つているので御座いますわよ？」

「えつ」

無線機から垂れ流される呑気な会話をBGMに、2人は揃つてお行儀悪く紅茶を飲み干した。

「ペコ、おかわりを」

「はい。ただいま」

車輌の修理、クルセイダー1輌に撃破されたマチルダ隊のメンタルケア、聖グロOG会の最大派閥であるマチルダ会への説明等々、やることは山ほどあるが、今は紅茶を浴びるほど飲みたかったのである。『『寒いなら紅茶が温めて、熱いなら紅茶が冷まして、落ち込むなら紅茶が励まして、興奮は紅茶が醒しますわ』……でも紅茶は悪夢からは醒ませてくれないのね……』

「私達はいつの間に『モ○ティ・パイソン』の世界に迷いこんだのでしょうか……」

さて、この騒動の原因。それ自体はいつものダージリンの思い付きなのだが、更なる元々の発端は昨年まで遡る——。

はじめての戦車　その2

聖グロリアーナ女学院。神奈川県所属の学園艦であり、戦車道強豪校。

そして何より生糀のお嬢様学校である。本校があるイギリスの影響を強く受けた厳格な教育と優雅な習慣。その伝統と格式、誇りと気品と意地を重んじる校風が真の淑女を育てるのだ。マジノ？ BC ? カエル食つてるような奴はお嬢様じやない。いいね？

話を戻して、戦車道は学園の花形、全校生徒だけでなく教職員やOGからも注目される中心的存在だ。戦車道履修者達は生徒の模範たろうと日々の自己研鑽に努め、周りはそんな彼女達に憧れ、見習いつつも、時として全力でサポートする。

そんな聖グロ戦車道だが、一つの大きな悩みを抱えている。それは「予算がないわね」

ダージリンはクロムウェル巡航戦車の修理見積書を眺めながら呟いた。

アンツィオ高校あたりが聞けば「イギリス料理と紅茶が大脳だけではなく前頭葉までおかしくしたか？」と言いたくなるであろう発言だが、事実だ。

「マチルダ会は相変わらずかしら？」 アッサム

「足だけしか取り柄のない金食い虫より、堅牢で優雅なマチルダを充実させることです」

『一生の最もすぐれた使い方は、それより長く残るもののために費やすことだ』

「皮肉ですか？」 ダージリン

「まさか、我が校の伝統を守るために奮闘しての方々よ。称賛するべきでしよう？」

「……消散すべきと言いたい訳ですね」

『その場にいない人を、批判してはいけない』ええ。私は淑女ですもの。決して、そんなことは言わないわ

「決して、決してね」と、口ではそう言っているが、どう見ても自分

に言い聞かせているようにしか見えない。アツサムは長く連れ添つてゐる戦友に紅茶を淹れてやろうと思つた。ここはアツサムの私室だ。愛用のティーポットと、今のダージリンにピッタリの茶葉を棚から取り出す。

「この香り……ダージリンのアールグレイね」

「ご名答。今回はアイスで淹れますから少し待つてくださいな」

「アイスティーなんて邪道よ」

「今は2人きりですし、言いつこなしですよ。それに貴女も好きでしよう？」アールグレイのアイスティーは

「……嫌いになれるわけないじやない……」

いつもなら絶対に漏らすまい素直な言葉に、からかいの一つでも言いそうになるが、淑女たるアツサムは黙つていた。

紅茶の国の由緒ある淹れ方に、たちまちベルガモットとダージリンのフレーバーが溢れ出す。濃い目にしたそれを氷の入つた頂き物のグラスに注いで、適温になれば完成だ。

「このグラス、アールグレイ様からのものね」

「こういう時しか使えませんから」

決して安いグラスではないが、聖グロ生徒の生活水準から見れば珍しくもない品物。けれども2人にとっては大切な宝物で、ダージリンもこれと同じものを2つ持つてゐる。

聖グロリアーナ女学院戦車道先代隊長アールグレイ。彼女が現隊長ダージリンと副官のアッサムに、その職務を引き継いだ時、2人に贈つたもの。

「クラブハウスで堂々と、アイスティーを飲んでらつしやつたのはアールグレイ様だけだつたわね。淹れたての紅茶に買つてきた氷をジャボジャボ入れて」

腰に手を当てて、瓶牛乳を飲み干すような仕草をするダージリン。その右手はティーカップを持つてゐる手付きだつた。

ちなみにその時使つていた氷はセブ〇プレミアムブランド。聖グロでは一周回つてレアな代物であるそれを、どこで手に入れたのかは今でも不明である。

「懐かしいですね。見ていらぬくて私達2人でちゃんとしたアイスティーや淹れ方を勉強するはめになつて……。今思えば、どこまで計算だつたのかは分かりませんが」

手元のグラスを傾けるとカラ～ン、と氷が鳴る。慣習のティータイムの時間に、この音が鳴るのはアールグレイがいたテーブルだけだった。

聖グロリアーナ女学院が保有しているクロムウェルは彼女の置き土産だ。自他共に認める変人だつた彼女は隊長になつた途端クロムウェルを導入、今まで冷や飯食いだつたクルセイダー隊を率いて成果を上げた。

が、クロムウェルは昨年の全国大会で破損して以降、応急処置のみであとは放置されている。理由はOG会の最大勢力マチルダ会の圧力だ。結果クルセイダー隊は倉庫番に逆戻り、卒業したアールグレイもまた、半ば出禁扱いとなつていて。

そして重度の格言癖以外は完璧な淑女で、アールグレイの奔放な行動に辟易し、世話係でありながら、ことあるごとにOG会へ苦言を呈していたダージリンが、満場一致で隊長に推されるのは、至極当然のことだつた。得意な戦法は機動力を重視した撃乱戦を好んだアールグレイとは真逆で、マチルダの装甲を全面に押し出した浸透制圧。マチルダ会はこれで安泰と胸を撫で下ろした。

それもアールグレイの計算の内だつたのだが。その実ダージリンとアツサムは彼女の共犯者である。

勝てない伝統なんていらない。

それがアールグレイが最後に漏らした唯一の本音だつた。

だからこそダージリンもアツサムも先代の遺産をしつかり受け継いでいる。クロムウェル、アイスティー、漫画、麻雀、mtg……等々。過激なセクハラ行為以外は。……セクハラの代わりに今代の隊長はproverbial harassment^{格言的ハラスメント}なんていう新種のハラスマントを生み出しているのは、聖グロの新しい伝統なのだろうか。オレンジペコには是非、この悪しき風習を断ち切つてもらいたい。

「アールグレイ様が作つた切つ掛けを私達が潰すわけにはいかない

わ。予算は下りずとも、なんとかクロムウェルを修理しなくてはね」「もちろん……とは言つてもマチルダ会が絡まない予算なんて、ああ予算といえば」

思い出話も程々に切り上げ、アツサムがいつものノートパソコンを開いてメールを確認する。

2人が思い出に浸るには、やらなくてはいけないことが多すぎた。「情報部によれば、大洗女子が新しい戦車を購入する気のようです」「みほさん達が？ 失礼だけれど、どこにそんなお金があつたのかしら」

ダージリンはグラスをテーブルに置くと、視線をアツサムに合わせる。「新着のメールが入つてます」と2、3操作をするのが見えた。「どうやらほぼ個人購入の形態ですね。出資者は2名、鴉羽唯夢と猫山霧音という方です」

向けられたディスプレイに映つている写真を覗き込む。見覚えのない顔だ。

「随分と可愛らしい方達ね。特に白い子。背景は？」

「そこまではまだ。情報部も掴みあぐねて いるようとして……、この金額をすぐに用意出来る家となると、ある程度絞れそうなものですが」

「ふむ……」

ダージリンはしばし思案する。そしておもむろに立ち上がった。「ちよつとクルセイダー会に連絡を取るわ。すぐに戻るから紅茶はこのままにしていて頂戴」

「ええ。待つてます」

ドアの閉まる音。

「いつもの調子を取り戻したのは良いですが、また変なことを思い付いてますね……」

アツサム一人になつた部屋で溶けた氷が楽しげな音を鳴らした。

ダージリンは一つ妙案を閃いた。その実行のため、クルセイダー会

に連絡を取ったところ

「ごめんなさい、私達、クルセイダーのリバティエンジンで耳をやられてしまつたの。もつといい戦車に乗りたかつたわ」

いや、やられたのは人生の速度計でしょう、と突っ込みたかつたが、とにかく了承は取り付けた。

クルセイダー会の皆様は卒業後即結婚か、一生をスピードの向こうに捧げるかの両極化が年々進んでいる。そして破局する場合も一瞬だ。ちなみに一番未婚率が高いのはマチルダ会。チャーチル会はクルセイダー会とマチルダ会の間。

（でも年々平均結婚率は減少して……、やめておきましょう）

何か空恐ろしい気配が背筋に這い上がってきた。まるでドグラ・マグラのような。理解してしまつたら、自分は何かとても大切なものを失つてしまう気がする。

私は普通のチャーチル乗り。普通に生活してれば普通に結婚出来るわ。

だから毎年出会いを求め、パーティを徘徊するゾンビにはなり得ない、と自分に言い聞かせた。

そんなことより問題は クルセイダーをいかに大洗女子へ売りつけるかである。

戦車を購入するには手間がかかる。無名校が一からとなれば半年はかかるだろう。そこに私が颯爽と登場、紅茶片手に「お困りのようね」と如何にも貴族の義務かのようにクルセイダー（有料、クーリングオフ不可、保証なし）を提供するのだ。

大洗女子は戦車を手に入れ、自分達はクロムウェルの修理費用を得る。

お互にwin-winの完璧な関係じやない、と会心の策に顔がニヤけるのを抑えきれない。何より自分がカツコいい。きっとみほさんも惚れてしまうだろう。

通りすがりの聖グロ生が「またダージリン様が変なことを考えてらつしやるわ……」と、そつと避けられようと気にならないくらい上機嫌だった。

今なら髪型を「ザザエさんみたい」と言われても、スター・ゲイジーパイを顔面に投げつけるだけで許せそうだ、とも思った。いつもの大ージリンなら容赦なく、肥溜めマーマイト風呂にぶち込むだろうから寛大な対処である。

某共産国家の大統領みたい、と思つた読者は夜道に気をつけるように。おそロシア。

が、大ージリンの機嫌が良いのはアヘン吸つてのよう最高に冴えてる妄想しているから、だけではない。

最初にことわつておくが大ージリンは頭がいい。

具体的に言えば頭が良すぎて筆者が描けないくらい。筆者より頭の良いキャラは描けない全員書けないじやんとか言わないので、そこは大ージリンじやなくて、やつすいティーバッグの出涸らしになつても許して欲しい。これ以上は筆者がクスリをキメる羽目になる。

しかし同時に大富豪の典型的な箱入り娘で、世間知らずだ。この世界線では若干、某掲示板に汚染されているが、人格形成に影響が出るほどではない。そもそも英国人は下品なジョーク大好きだしね。残念だが当然、むしろ正しいと言える。

故に彼女は突然現れた大量の現金を持つ白髪だか銀髪だか分からぬ身元不明の少女を見てピンときた。
(この子……きっと鷺○麻雀で勝ったのよ!)

やつぱりアヘンキメてるじやないか。やつぱり妄想じやないか。アールグレイの遺した漫画の影響をモロに受けていた。なまじつか、その額を用意出来るレベルの家に生まれたのと、勝者を素直に称える高潔な性分が災いした。災いどころか天災だよ。

そして黒髪の方は勝手にカ○ジ認定していた。あるいは森田○雄。更に大ージリンはカ○ジがあまり好きじやない。

リアルア○ギに会えると思い浮き足立つ大ージリン。誰でもいいから巻き込みたいと思っていたところで丁度いい生贊オレンジペコ^生_贊け^けペコ_贊がいた。

「行くわよ！ ペコ」

「えつ、ちょっと大ージリン様!!?」

「『時のある間にバラの花を摘め、時はたえず流れ、今日ほほえむ花も明日には枯れる』」

「ロバート・ヘリックですね、つてどこに行くんですか!?!?!?」

オレンジペコにロクに説明をしないままヘリに乗り込むダージリン。リリーフカーに乗り込む巨人小笠原聖グロダージリンと聖グロのダージリンは別人並にウツキウキだった。

妄想を垂れ流したちやんとした説明をしたのは、もう30分で大洗女子の学園艦に着くという時で

「ねえペコ、アナタもア○ギに会いたいでしょう？」

「こんなことのために勝手にヘリを飛ばしたんですか？ その方に興味がないと言えば嘘になりますけど、ええー……」

搭乗するや否や手渡されたア○ギの単行本を膝の上に置きながら、ダージリンの話に辟易するオレンジペコ。横にはいつ運び込まれたのか残りの35巻が鎮座している。読み飛ばしに読み飛ばしを重ねてやつと、鷺○麻雀のさわりまで来たが、先は長い。

(確かに会つてはみたいんですけどね)

危機感より好奇心が優つている辺り、この子も相当な世間知らずだった。箱入り度ならダージリンをも上回っているので当然だが。ア○ギ、ペコはカ○ジを探して頂戴。聖グロまでご案内してくるセイダーを買わせるのよ

「もう完全に同一視してるんですね……。流石に見ず知らずの上級生に声をかけるのは厳しいので、私が猫山さんと話したいのですが」「仕方ないわね。ヘリではちやんとお相手するのよ」

「はい」

ア○ギにお金絡みの話は死亡フラグでは、と思つたが、時間の無駄なので黙つた。オレンジペコは聰い子なのだ。諦めているとも言う。それより続きが読みたかった。

「そろそろ着くわ。準備しましよう」

「鷺○麻雀の結末まで読みたいんですけど……」

「残りの巻、全部鷺○麻雀よ」

「えつ」

こうして大洗女子の学園艦に降り立った2人、幸か不幸かそれぞれ
目当ての人物はすぐ見つけることに成功。

件の人物2名は戦車道演習中に、乗員の心を大破させると言う重大
な事故を引き起こして、時間が終わるまで待機処分になっていたので
ある。片方は校門近くで草刈りを、もう一方は倉庫前でボーッとして
いた。

そう。幸か不幸か、である。幸運だったのはオレンジペコ。不幸
だったのはダージリン。

「とりあえずパンツ見せてください？」

「……………は？」
この日ダージリンの苦手な人ランキングに見事同率1位が追加さ
れた。

なおこれ以降、激しい1位争いが生涯続く模様。